



わたしの聖戦

女性が働くことについて

104

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

御用学者さま

近頃、「御用学者」とよく耳にする。東日本大震災の、特に原発がらみで登場する、ある一部の医学者や原子力関連の研究者たちを揶揄（やゆ）する表現として使われている。

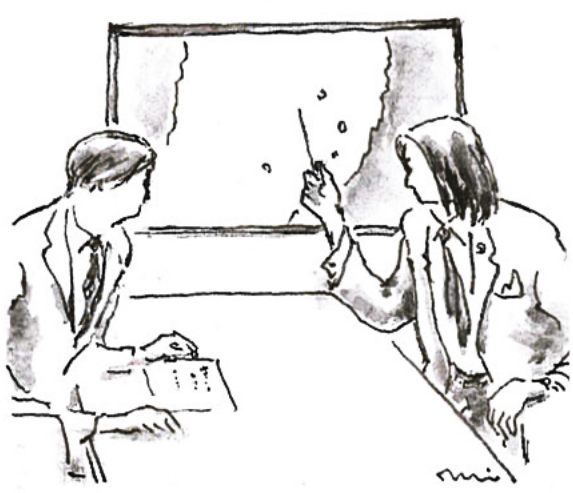
「御用学者」とは何か。辞書によれば、「時の政府・権力者などに迎合して、それに都合のよい説を唱える学者」とある。もとは、江戸時代の徳川政権安定化を目的として、文治主義と朱子学により上下関係を明確にしようにとしたのが誕生の発端らしい。当時、幕府の御用学者の筆頭といえば林羅山がいる。徳川家の威信を保つために、数々の逸

話を流布したと伝えられている。

身近でわかりやすいのが、たばこ産業と学者・研究者の関係である。たばこ産業は、潤沢な予算を「研究費」と称して、研究者たちに体裁よくばらまく。お金をもらった者は、たばこの害について控えめな研究結果しか出さないし出せない。データの改ざんというほどではないものの、出た数字についてあいまいな解釈を加えることで、たばこの害を矮小（わいしょう）化してしまうことがまみられた。

こ産業及びその関連機関との共同研究、及び同産業等から研究費等の助成を受けた研究を行わない」との宣言を出したほどである。国民の健康を守ることに目的の学会において、バイアスの多い研究結果は道理からいっても好ましくない。極端

御用学者登場によって...



し、おのずとその言動に「怪しい」ところが見え隠れするからだ。しかし彼らは、御用学者といわれてもそれほど恥だと考えていないようである。それを恥と思えば、自身の研究人生そのものにケチがつくのだから、致し方ないのだろう。いわゆる厚顔無恥と呼ぶのがピッタリだ。

に言えば、たばこはがん予防になるといったところでもない結論が独り歩きしかねないからだ。御用学者は、同業ならすぐ見破ることができ。研究した結果を論文としてまとめる際に、研究費をもらった旨を必ず末尾に書かなければならない

今回の原発関連事故も「大丈夫だ」とテレビで言い続けた人のなかに、御用学者と呼ばれる面々が多数見受けられた。メディアはスポンサーとの関係で、なかなか正直な発言ができないといった一面があるが、御用学者登場によってさらに真実が見えなくなってしまったことは、国民の混乱と不安に拍車をかけた。

ターなど、国民参加型の情報発信が発達している。「本当に大丈夫なの？」と疑っていたところに、次々と新事実が暴露されるのだから、救いようがない。放射能の健康被害について、冷静に対処しようと思っても、国のふがいなさがそうさせてくれない。

機会をいただき、避難所の方々の調査に同行した。津波からやつの思いで逃げてきたおばあさんは、転々とする避難所で一日一個のおにぎりが続いたとき、「わたしらに殺される、と叫んだ」と述べていた。80歳を過ぎてこのような思いにかられる国民の存在があってもなお、御用学者たちはのうのうとテレビに出て自分に都合の良い発言を繰り返している。私は、御用学者もひとつの生き方だと思ってきたが、さすがに今回ばかりはそれでは終わらない気がしている。